

平成二十九年 入学試験問題

国語

第三回

【注 意】

- ・試験時間は五〇分です。(八時五〇分～九時四〇分)
- ・問題は一ページから七ページまでです。
- ・解答はすべて解答用紙の解答らんに記入してください。
- ・字数制限のない問題について、一行分の解答らんに二行以上解答してはいけません。
- ・解答用紙に受験番号、氏名を記入してください。



洗足学園中学校

【1】次の文章を読んで後の問いに答えなさい。なお次の文章は伊藤亜紗『目の見えない人は世界をどう見ているのか』の前書きにあたる部分です。

私たちが得る情報の八割から九割は視覚に^(ア)ユライすると言われます。五感のうちで視覚は特権的な位置を占めていますし、とくに西欧の文化では視覚が非常に重要視されています。⁽¹⁾パリのシャンゼリゼ通りなどを歩いていると、凱旋門^{がいせんもん}に向かって目線がスーッと吸い込まれるような感覚を味わうことができます。西洋では都市のつくりまでもが目の快楽のためにデザインされているのだな、と感じる瞬間です。

その、私たちが最も頼^たっている視覚という感覚を取り除いてみると、身体は、世界のとらえ方はどうなるのか？ そう考えて、私は新しい身体論のための最初の[★]リサーチの相手として、「見えない人」に⁽²⁾の矢を立てました。つまり、「見えない人」は、私にとって、そして従来の身体論にとって、ちょうど[★]補色のような存在に思えたのです。ずいぶん長くありませんでしたが、これが、私が「視覚を使わない体に変身してみたい」と思った理由です。

見えない体に変身したいなどと言うと、何を[★]不謹慎^{ふきんげん}な、と叱^{しか}られるかもしれません。もちろん見えない人の苦勞や苦しみを軽^かんじるつもりはありません。

でも見える人と見えない人が、お互い^{たが}にきちんと好奇^{こうき}の目を向け合うことは、自分の盲目^{もうもく}さを発見することにもつながります。[★]美学的な関心から視覚障害者について研究するとは、まさにそのような「好奇の目」を向けることです。後に述べるように、そうした視点は障害者福祉^{ふくし}のあり方にも一石を投じるものであると信じています。

ではいったい、どのようにして「見えない体」に変身すればよいのか。そんなの簡単だよ、視覚を遮^{さへ}ればいい、目をつぶったり[★]アイマスクをつければいいじゃないか、と思われるかもしれませんが。

いいえ、視覚を遮れば見えない人の体を体験できる、というのは大きな誤解です。それは単なる引き算ではありません。⁽³⁾見えないことと目をつぶることは全く違^{ちが}うのです。

見える人が目をつぶることと、そもそも見えないことはどう違うのか。見える人が目をつぶるのは、単なる視覚情報の遮断^{しやだん}です。つまり引き算。

25

20

15

10

5

そこで感じられるのは欠如^{けつじゆ}です。しかし私がとらえたいのは、「見えている状態を基準として、そこから視覚情報を引いた状態」ではありません。視覚抜きで成立している体そのものに変身したいのです。そのような条件が生み出す体の特徴^{とくちょう}、見えてくる世界のあり方、その意味を実感したいのです。

それはいわば、四本脚^{あし}の椅子^{いす}と三本脚の椅子の違いのようなものです。もともと脚が四本ある椅子から一本取ってしまったら、その椅子は傾^{かたむ}いてしまいます。壊^{こわ}れた、不完全な椅子です。でも、そもそも三本の脚で立っている椅子もある。脚の配置を変えれば、三本でも立てるのです。

脚の配置によって生まれる、四本のバランスと三本のバランス。見えない人は、耳の働かせ方、足腰^{あしこ}の能力、はたまた言葉の^(イ)テイギなどが、見える人とはちよつとずつ違^{ちが}います。ちよつとずつ使^{つか}い方を変えることで、視覚なしでも立てるバランスを見つけているのです。

⁽⁴⁾するとは、そうした視覚抜き^(イ)のバランスで世界を感じてみるということとです。脚が一本ないという「欠如」ではなく、三本が作る「全体」を感じるということとです。

異なるバランスで感じると、世界は全く違^{ちが}って見えてきます。つまり、同じ世界でも見え方、すなわち「意味」が違^{ちが}ってくるのです。

この「意味」というものをめぐって、本書は最初から最後まで書かれています。といっても過言ではありません。意味にはおのずと生まれるものと、意識的に与^{あた}えるものがありますが、本書ではその両方^{あつ}を扱^{あつか}っています。

とは言ったものの、そもそも「意味」とは何でしょうか。ずいぶん原理的な問いですが、本書の[★]スタンスに関わるところなので、紙面を割いて確認しておきたいと思えます。本書で言う「意味」のニュアンスは、「情報」と対置すると明らかになります。

「情報」は、客観的で[★]ニュートラルなものです。^(A)「明日の午後の降水確率は六〇パーセントである」。これはふつう情報として受け止められます。友人の「明日の午後の降水確率は六〇パーセントだよ」という発言に対して「ありがとう」と言ったら、それは「情報をありがとう」「大事な情報を教えてくれてありがとう」という意味です。

それに対して、たとえば恋人^{こいびと}の言う「あなたは石頭だ」を情報として受けとってしまったら、きつと次にくるのは別れの言葉でしょう。これはむしろ感情の吐露^{とろ}です。ここであなたがすべきなのは、メモをとることではなく、恋人の感情に対して、なだめるなり反論するなり、[★]アクションを起

60

55

50

45

40

35

30

ことです。

報告者が自分の主観を述べたものは情報ではありません。情報とは、報告者の主観を排した、客観的な内容のことを指します。

しかし、この「明日の午後の降水確率は六〇パーセントである」という「情報」は、受け手次第で、無数の「意味」を生み出します。明日運動会を控えた小学生なら、この情報は「運動会がエンキになるかもしれない」ということを意味するでしょうし、傘屋なら「明日は儲かるな」、農家なら「朝の水やりは控えめにしよう」となるでしょう。

日を通じた人なら、ここに何かの「アンジ」を読み込むかもしれない。

受け手によって、どのような状況に置かれるかによって、情報は全く異なる意味を生み出します。

そんなことはありません。昆虫や動物も立派な意味の構成者です。このことを分析したのは、エストニア生まれの生物学者ヤーコブ・フォン・ユクスキュルです。ユクスキュルは一九三〇年代という早い時期に「環世界」という概念を提示して、生物学のみならず哲学をはじめとしたさまざまな学問領域に影響を与えました。

ユクスキュルの著作を翻訳している生物学者、日高敏隆の『動物と人間の世界認識』を手がかりに、ユクスキュルの「環世界」とは何かひもといていきます。

初夏、キャベツ畑にモンシロチョウが飛んでいます。しかし時間帯によつて、モンシロチョウにとつてのキャベツ畑の見え方は違います。午前中は交尾の時間帯です。オスは、交尾の相手を求めてキャベツ畑を飛び回っています。メスにとつてもオスの存在こそが重要です。実際にはあたり葉や花が存在しているのですが、全く目もくれません。

午後になると、空腹になるでしょう、モンシロチョウたちは今度は花の蜜を求めようになります。急に、花が「見え始める」のです。しかも、重要なのは咲いている花。つぼみではなく開いた花だけが、意味のあるものとして、モンシロチョウたちの世界を構成するようになります。

ユクスキュルにとつて、それぞれの生きものは、意味を構成する「主体」です。個々の「主体」は、周りの事物に意味を与えてそれによつて自分

とつての世界を構成している。この「自分にとつての世界」が「環世界」と呼ばれるものです。生きものは、無味乾燥な客観的な世界に生きているのではありません。自分にとつて、またそのときどきの状況にとつて必要なものから作り上げた、一種の「イリュージョン」の中に生きているのです。

主体が周囲の事物にどのような意味を与え、それがどのような環世界を作り出しているのか。本書は、そうした「意味」を切り口として、見えない人と関わっていかうとするものです。

それは探求の方法であると同時に、見えない人と見える人の関わり方の提案でもあります。というのは、見える人が見えない人に対してとる態度は、一般的にはどうしても「情報」ベースになりがちだからです。そこに「意味」ベースの関わりも追加していきたい、という意図が本書にはあります。

(伊藤亜紗『目の見えない人は世界をどう見ているのか』)

★リサーチ……………調査。

★補色……………ここでは「考えられて来なかったことを補う」といった意味。

★不謹慎……………不注意で、つつしみのないこと。

★美学……………自然・芸術における美の本質や構造を解明する学問。

★アイマスク……………明るい所でも安眠できるように用いる目隠し。

★スタンス……………事に当たる姿勢。立場。

★ニユートラル……………中立。

★アクシヨン……………行動。

★イリュージョン……………幻想。錯覚。

問一 — (1)「パリのシャンゼリゼ通り」とありますが、筆者は何のためにこれを例示したのですか。解答らんに二行以内で説明しなさい。

問二 「(2)の矢」とありますが、(2)に入れるのにふさわしい漢字二字の言葉を自分で考えて書きなさい。

問三 — (3) 「見えないことと目をつぶることは全く違うのです。」とありますが、どのような違いがありますか。解答らんに三行以内で説明しなさい。

問四 (4) に入れるのにふさわしい漢字二字の言葉をこれより前の文中から抜き出しなさい。

問五 — (5) 「昆虫や動物も立派な意味の構成者です。」とありますが、これはどういうことですか。解答らんに二行以内で説明しなさい。

問六 A 〷 D に入れるのにふさわしい言葉を次のア、エの中から一つずつ選び、記号で答えなさい。(ただし記号はそれぞれ一回ずつ使用します。)

ア つまり イ あるいは
ウ ところが エ たとえば

問七 — (ア) (オ) のカタカナを漢字に書き直しなさい。

問八 本文の内容に合うものを次のア、エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 筆者は見えない人がどのような「意味」を構成しているのかに関心を持っていて、それは見えない人と見える人との関わり方について考えると考えている。

イ 筆者は見えない人が視覚を持たないことを「欠如」とは考えておらず、むしろ、他の感覚を感じる人よりも強くするエネルギーのようなものだと考えている。

ウ 筆者は見えない人がどのような「自分にとっての世界」を作り出しているのかに注目しており、それは実は見える人とはまったく変わらない世界であると考えている。

エ 筆者は見える人が見えない人にどう接すればいいのかを提案していて、見えない人には「情報」ではなく「意味」の方が重要であることを理解すべきだと考えている。

② 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

小さいわたしにとって、団地を出るのは恐怖だった。しかし、団地の中
にいることすら、安心はできなかった。つまり、団地の個々の家はそつ
くの形をしていて、どこにも似たような家族が暮らしていて、いつ、わた
しの家族と入れ替わってしまうかわからない。両親と祖母のいる、あの小
さな★3LDKが、わたしの唯一の安心できる場所であり、それ以外のと
ころへは恐ろしくて行けなかった。幼稚園すら、一日で退園した。これが
わたしの幼少期である。

両親といっしょなら、あるいは祖母といっしょなら、バスにも乗れたし、
電車でも出かけることもできた。⁽¹⁾しかし、家族と離れて独りでどこかへ行
くなんて、考えただけで恐ろしいことだった。

そのわたしが、小学校に入学する羽目に陥るのである。
事前にいろいろなことを、言いさかされてはいたに違いない。しかし、
巣穴の中の定位置のような3LDKを出て、家族とも離れて、得体の知れ
ない集団生活に入ることなど、当時のわたしには想像を絶する恐怖だった
と思われる。

入学式には、母ばかりではなく父も会社を休み、両親に両手を取られて
つりさげられるようにして出かけた。

翌日からは、集団登校といって、団地の一角に同じ小学校に通う児童が
集まって、六年生をリーダーに徒歩で学校へ出かけることになっていたが、
足が震えて昏倒しそうになっているわたしを、困った班仲間は置き去り
にして行ってしまった。半日だけ休みを取って、わたしの様子を見ていた
母は、困惑しながら小学校に送り届けたが、母の姿が見えなくなると、わ
たしは恐怖で叫びだし、一年生の教室を妨害した。

わたしは最初の数週間で登校拒否して過ごした。両親の出かけた家で、
家から一歩も出ずに過ごしたのだ。母方の祖母が呼ばれてきたり、母の妹
が世話にやってきましたりした。家にさえいられば、一人にしておいてもさ
ほど問題がないことがわかって、食事やおやつを用意して出かけた母が帰
るまで、一人で過ごしたこともある。

ずっとそのままにしているわけにもいかないので、少し落ち着いてから、
母がなんとか職場の都合をつけて毎日登校につきあい、下校時に迎えに来
るという方法をしばらく続けることになった。小学校に入れたら、放課後

30

25

20

15

10

5

は学童保育で面倒を見てもらえば仕事を続けられると思っていた母は窮地に陥った。

いくつかの方法が★試行錯誤されたが、わたしの恐怖は去らず、母
はもう仕事を辞めるしかないと思ったのだという。

ある日、学校の帰りに母はわたしといっしょに喫茶店に立ち寄った。ラ
ンドセルを背負った子どもと放課後にコーヒを飲みに行くなんてことは、
あまり勧められることでもなさそうだけれど、母はよほど疲れていたのだ
ろう。

ちりんちりんと、ドアについたベルが鳴った。

カウンターのマスターが顔を上げた。

「お好きなところへどうぞ」

とマスターが言った。

母はわたしを促して、窓際の席に腰掛けた。

わたしは母の正面には腰を掛けずに、まっすぐ部屋の隅の赤い櫛に向
かった。

「こつちに来て。ちよろちよろしないで」

母は言った。

「いいんですよ。あそこ、気に入ってるから」

★カップを、リネンで拭きながらマスターが言った。

⁽²⁾母はヘンな顔をした。そして、黙って自分にはミルクティーを、わたし
にはオレンジジュースを注文した。

「ホットミルクもできますよ」

と、マスターが言った。

「ホットミルクがいい」

と、わたしは注文した。

「あいよ」

と、マスターが言った。

母は、今度こそ、異様なものを見るような目つきで、わたしとマスター
を交互に見つめた。そして、腹から絞り出すような声でわたしに訊ねた。

「あなた、ここに来たことがあるの？」

「おばあちゃんね」

こともなげに、マスターは言った。

「おばあちゃん？」

60

55

50

45

40

35

わたしは樽の中に腰掛けて、**A** うなずいた。しかし、母にはその姿が見えなかったのだろう。彼女は**大股**で歩いてやってきて、樽の中を覗き込んだ。

「あなた、おばあちゃんと来たの？」

「しばらくみえないんで、どうしたかなと思ってたんですよ」

マスターが代わりに答えた。

母はぐるんと振り返った。

「義母は、先日、他界しました」

と、母は言った。

マスターは困ったように口を開けて、何か **B** していたが、やがて落ち着きを取り戻して、

「やあ、それは。ご愁傷さまでした」

とだけ言った。

「なんだよう、婆さん、死んじまったのかい」

スポーツ紙に目を落としていた老小説家が目を上げた。ぞんざいな言葉の割には、大きなシヨックを受けているようだった。

ちりんちりんと鈴を鳴らして、神主と歌舞伎俳優が入ってきた。

「おう、聞いたかい。タタンの婆さんが死んじやったんだってよ」

老小説家が言った。

「え？ チビちゃんのおばあちゃまが？」

神主はいったん座った腰をびくりして上げるほど驚いて、

「あら、いつ？」

と、誰にもなく訊ねた。

「ちよつと前です。三月の頭です」

戸惑いながら、母は答えた。次から次へと現れる男たちが、みんなして祖母を知っていることに、たいへんな衝撃を受けたらしい。

「お悔やみ申し上げます。そりゃ、知らなかったなあ」

鉢の開いた頭をした、ちよつと見てくれのいい若い男までが、そう言うて母に頭を下げるのだった。

わたしは久々に来た店で、**C** リラックスして樽の中に座っていた。

ほんとうにどうしてだか **D** わからないのだが、わたしはこの店の

赤い樽の中にいれば、団地の中の自分の家にいるのと同じくらい安心できた。初めて祖母と二人で店に足を踏み入れたときから、不思議に落ち着か

95

90

85

80

75

70

65

せてくれる空気が存在したのだ。

祖母は、

「体がなまるから、散歩だ」

と言っでは、腰に手をあててゆっくりゆっくり、どこへでも行った。団地の敷地を出て、わたしの手を引いて横断歩道を渡り、ニンジン畑の間の道を行って坂を下って、煙草販売店の先にこの店を見つけたときは、悪戯を思いついたような顔をして、

「入ってみるか」

と、わたしに笑いかけた。

生涯のほとんどを田舎で過ごした七十代の祖母が、喫茶店に入ってコーヒーを注文する姿を思い出すと、やはり奇妙な気持ちになる。けれども、あのころわたしはまだ小さかったし、明治生まれ、田舎育ちのおばあさんが、コーヒーを飲むのが似合わないなんてことを考えるだけの予備知識もなかった。

それに、いくら明治生まれとはいえ、彼女なりに戦後の日本を生きており、コーヒーにも紅茶にも馴染んでいたとしても、なんらおかしいこともないはずだ。祖母はしげしげメニューを見つめ、自分のためにブレンドコーヒー、わたしにはホットミルクを注文した。ホットミルクというものを、わたしはこの店で初めて飲んだのだと思う。

「砂糖をちよつと入れると、うんまいんだ」

小さな声で言っで、祖母は少し震える手で、ホットミルクにグラニュー糖を入れて混ぜてくれた。甘いホットミルクはたいへん美味しかった。

★店には独特の風貌の、変わった人たちがいたけれども、そのころは彼らが変わっているとすら思わなかった。祖母は誰とも愛想よく接していた。ただ、方言でしゃべるのが恥ずかしかったのか、ほとんど言葉が発することなく、笑顔でうなずいたり、

「へえ」

とも、

「ええ」

とも聞こえる相槌を打ったりしていた。店の常連たちは、祖母と特別に話があるというわけではなく、それぞれ勝手に言いたいことを言っで、帰っていくような連中だったから、祖母が話そうと話すまいととくに気にもかけなかった。ただ、優しい、愛想のいい笑顔を向けてくれる老婆のこ

130

125

120

115

110

105

100

とが、嫌いではなかったらしい。いつのまにか、祖母は店の仲間の一人になっていったのだ。

なぜ、わたしがあの店に居着いてしまったのかは、いまだにわからない。祖母といっしょに行ったその最初の日から、特別な店だったというのが間違いないと思う。それでも、たった一人でそこに行くことが平気になるほどに、店を自分の陣地のように思い始めたのはなぜなのだろう。

「あんた、ここにいっても発作は起きないの？」

ミルクティーを飲みながら、母がわたしに訊ねた。発作というのは、べつに病気でもなんでもなくて、わたしが学校で恐怖に駆られて叫びだしたことを指す。たびたび、わたしは恐怖にとりつかれて、唐突に落ち着きをなくすことがあったのだ。

樽の中で、わたしは首を上下に振った。

母は、何か考えるような目をして、ミルクティーに再び口をつけた。

母は結局、勤めていた病院を辞めて、わたしのそばにすることにした。でも、わたしを学校に送り、また迎えに行く日々の中で、なにがしか戦略を練ったのだと思われる。わたし自身も、集団生活に慣れるにつれ、学校は叫びだすほどの恐ろしいところだとは思わなくなっていたし、団地の数ある3LDKから我が家をえり分けるのがさほど難しいことだとも思えなくなっていた。

そして、あるとき、母は別の病院に仕事を見つけてきたのだ。母が家にいたのがどれくらいの期間だったのか、わたしにはもう思い出せない。⁽⁵⁾ 気がついたときは、集団登校で学校に行き、帰りは一人で喫茶店に駆け込む毎日を送っていた。

一つだけ、思いあたることもある。喫茶店に行くとき、あるいは学校に行くときさえ、わたしは一人ではないと思えるようになっていた。それは、とりもなおさず、祖母が死んだからである。

祖母自身は、電気が消えるように命の炎を消したのかもしれないが、たしかにわたしの心の中に入り込んだ。わたしは心の中の祖母と会話することを覚えた。

祖母は、わたしが生涯で初めて持った死者だった。死者の思い出が生者の生を豊かにすることを、わたしは祖母を亡くしたとき初めて知ったのだ。

(中島京子『ぱっと消えてぱっと入る』)

160

155

150

145

140

135

★3LDK…家の間取り。ここではそのような間取りをした家のこと。

★昏倒……目がくらんで、急に倒れること。

★試行錯誤…失敗を重ねながら解決方法をさがすこと。

★リネン……ふきん。

★風貌……身なりや顔つきなどの外見。

★常連……いつも来る客。

問一

——(1)「しかし、家族と離れて独りでどこかへ行くなんて、考えただけで恐ろしいことだった。」とありますが、なぜそのように思ったのですか。その理由としてふさわしいものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 住んでいる団地の周囲には似たような建物が多く、外に出ると自分の団地の場所がわからなくなりそうだから。

イ 住んでいる団地にはどれもよく似た外見の家族が住んでいたのだから、自分の家族が誰かわからなくなるのが不安だったから。

ウ 住んでいる団地にある家はそっくりな形をしていたので、一度離れてしまうと家族が入れ替わってしまうかもしれないと考えていたから。

エ 住んでいる団地にある家はどれも狭く動物の巣のように多くの人たちが住んでおり、知らない人ばかりで安心できなかったから。

問二

——(2)「母はヘンな顔をした。」とありますが、それはなぜですか。解答らんに二行以内で説明しなさい。

問三

——(3)「次から次へと現れる男たちが、みんなして祖母を知っている」とありますが、その理由を述べる次の文の空らん()に当てはまる語句を本文から五字以上十字以内で抜き出して答えなさい。

男たちにとって祖母は 五字以上十字以内 だったから。

問四

——(4)「戦略」とありますが、これは具体的には誰が何のために何をすることですか。解答らんに二行以内で説明しなさい。

問五

——(5)「気がついたときは、集団登校で学校に行き、帰りは一人で喫茶店に駆け込む毎日を送っていた。」とありますが、一人で家を出られなかったわたしが一人で過ごせるようになったのはなぜですか。解答らんに行以内で説明しなさい。

問六

——(6)「命」とありますが、「命」を使った次の一～五の慣用句の意味を、後の「意味」ア～オの中から一つずつ選び、記号で答えなさい。

- 一 命をけずる
- 二 命からがら
- 三 命しらず
- 四 命の綱つな
- 五 命拾い

【意味】

- ア おそれることなく何かをすること。
- イ もっとも頼りになるもの。
- ウ 努力や苦心をする。
- エ やつとのこと。
- オ 運よく助かること。

問七

A D に入れるのにふさわしい言葉を次のア～エの中から一つずつ選び、記号で答えなさい。(ただし記号はそれぞれ一回ずつ使用します。)

- ア ゆっくり
- イ すっかり
- ウ ぼんやり
- エ さっぱり

問八

本文の内容に合うものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 「わたし」は家族と離れて一人になるのが怖くて仕方がなかったの
で、学校に行くこともできず家族を困らせることになった。
- イ 母は「わたし」と学校の帰りに何気なく喫茶店に立ち寄り、そこで祖母の思わぬ過去を知ることになった。
- ウ 喫茶店のマスターは「わたし」のことをよく知っていたが、母のことを考えてははじめのうちはわざとそしらぬふりをしていた。
- エ 祖母が偶然見つけた喫茶店に入ったきっかけは若いころからコーヒーや紅茶が好きであったからである。

